秋の公園にて

池面がかすかに揺らいでいるのを知るのは
そこに映るひとつの星がゆったりと泳ぐとき―――

　　彼女は孤独を預けることをためらっていた
　　僕は腕を拡げることもできないでいた

白い鷺が狙いすましていたものは
それは水中深く沈んでいた眠りが浮かぶ―――その一瞬

　　次第に硬質さを増す大気に向けられた涙
　　僕に向けられることのない涙

冷え冷えとした夜空に打ちあがる花火の爆発音も
中ノ島に休むカモたちを羽ばたかせることはない

　　無力感は僕の涙を奥深く押し込める
　　空虚さが透明さを生むなどとうそぶく者がいる

枝垂れ桜の梢は語りかける
「閉じられた瞼にくちずけるとき孤独は涙と流れ去る」

　　柵にもたれたまま振り向かぬ彼女は
　　包帯をほどいたときに現われる傷口のように見える

僕は再び声を聞く
「言葉はお前のために生きていない」

　　僕は打ちのめされる

　　僕は流れてゆく

(2001.9.30)